

メッセージアウトライン

ヤコブの手紙 5:13 「祈りと賛美」

[13]「あなたがたのうちに苦しんでいる人がいますか。その人は祈りなさい。喜んでいてる人がいますか。その人は賛美しなさい」

クリスチャンは苦しい時、互いに悪口を言ったり、裁き合ったり、つぶやいたりするのはなく、祈ることが必要である。もちろん苦しい時だけではなく、どんな境遇にあっても祈ることは必要。Iテサロニケ 5:17には「絶えず祈りなさい」と言われている。しかし、ヤコブはここでは特に苦しみの時に祈ることを強調している。私たちは苦しみに中にある時にこそ、よりいっそう神に近づき祈る者となれる。苦しみ、悩み、悲しみ…、そのような中にある人は祈りなさい。つぶやいていても、腹を立てていても、うらんでいても始まらない。私たちクリスチャンは木や石で作られた神々ではなく、祈りを聞いてくださる真の神を信じている。私たちはこの天地の造り主である真の神に対して祈るのである。ことばを飾る必要はない。苦しんでいること、悩んでいることをそのまま単純率直に言い表せばよい。神は必ず私たちの祈りに答えて最善をなしてください。しかし、祈っているのにいっこうに変わった様子が見えないという人がいるかもしれない。しかし、ヨブもその問題で悩んだではないか。それでも彼は最後まで信仰を貫き通し、神から最善の答えをいただいたのである。自分の思うような結果が見えないからといって失望したりあきらめたり神に不平を言うのは早すぎる。

私たちの信仰の道は平坦な直線の道ではない。山あり、谷あり、落とし穴ありで時には一歩進んで二歩下がるというようなことがあるかもしれない。しかし、そこで私たちは忍耐を試され、信仰を練られていくのである。私たちは神に信頼し祈ることをやめてはならない。

私たちがクリスチャンとして生きていく上でもう一つ大切なことは賛美である。「喜んでいてる人がいますか。その人は賛美しなさい」と言われているとおりである。神が与えてくださった喜びのゆえに神をほめたたえ、賛美するのである。

救い主がベツレヘムに降誕された夜、羊飼いたちが野で夜番をして羊の群れを見守っていた時、突然御使いが現れて彼らに言った。「恐れることはありません。今、私はこの民全体のためのすばらしい喜びを知らせに来たのです。きょうダビデの町で、あなたがたのために、救い主がお生まれになりました。この方こそ主キリストです」そして、御使いがこの喜びの知らせを告げると同時に多くの天の軍勢が現れて神を賛美したのであった。→ルカ 2:8~14

救い主がこの世に来られた。これは罪の暗やみの中にあつたこの世にとって大いなる喜びである。そして喜びのあるところに、このすばらしい喜びを与えてくださった大いなる神をほめたたえる賛美がわき上がるのである。私たちに喜びがある時、その喜びを与えてくださった神をほめたたえるのは当然の行為である。

しかし、自分には何の喜びもないという人がいるだろうか。その人は神が私

たちに良くしてくださったすべてのことを思い起こす必要がある。神が私たちを罪と滅びから救ってくださったことについて喜びはないだろうか。神が死とさばきから私たちを贖い出してくださったことを思う時、喜ばなくてすむだろうか。そのことを思っても自分には何の喜びも感謝もないというのであれば、その人は神の恵みと救いを過小評価しているのである。

罪と悲惨の中に死んでいた私たち人間のために神のひとり子イエス・キリストがわざわざ貧しい人間の姿をとってこの世に来てくださり、十字架にかかって私たちの罪を贖ってくださるほど私たちを愛し、そして救ってくださった。神の愛はそれほど大きく深いのである。そのことを思う時、私たちは神を賛美しないわけにはいかない。私たちの神はまことに賛美されるべきお方なのである。→詩篇 103 篇

私たちも常に主の良くしてくださったことを思い、喜び、賛美をする者になりたい。礼拝において主を賛美するのもそのような意味があるのである。

私たちは神の与えてくださる恵みについていつも目を向けている必要がある。喜びは感謝の心を生み、主への賛美へと続く。

苦しみの時には祈り、喜びの時には賛美する。これこそクリスチャン生活にとって欠かしてはならないものである。